藤女子大学
図書館だより
Fuji Women's University Library

CONTENTS

1．最近の学術論文公開事情
—グローバルなオンラインジャーナルへの論文執筆を経験して—　小山田正人
4．教員著作紹介
6．学生による企画展示
7．図書館委員会からのお知らせ
8．図書館資料Navi　第2回

No.86
2013.10

最近の学術論文公開事情
—グローバルなオンラインジャーナルへの論文執筆を経験して—

食物栄養学科　小山田正人

はじめに

この小文では、最近のグローバルな学術論文出版事情を、Frontiers in Pharmacologyというスイスのオンラインジャーナルへの論文執筆を通じて体験した事柄を記載することによって、紹介したい。

特に伝えたいのは、最近の学術論文出版のポイントとして、(1) 質の高い論文のオープンアクセス（学術情報を、インターネットを通じて誰もが無料で閲覧可能な状態に置くこと）、(2) 迅速でフェアな査読制度、(3) 論文のアクセプトから早い公開、(4) 論文のインパクト（反響）をリアルタイムで知ることができるということである。

以下に、論文執筆の背景、執筆プロセス、査読、公開とその後の反響を時間経過にしたがって記述したい。

1．私の研究（ギャップ結合細胞間コミュニケーション）について

私は、1981年に札幌医科大学医学部を卒業して以来、病理学を専門としてきた。病理学は、病気がなぜ起こるかの原因と病気が発症してからいろいろな症状が起こるプロセスを明らかにし、最終的には疾病の治療や予防に繋げる学問である。医学部4年生から病理学教室で研究の手伝いをしていた私は、病理学のなかでも特に細胞小器官（ミトコンドリア、小胞体、細胞骨格など細胞内に存在する構造物）の構造や機能の異常と病気の発症の関係に興味を持って研究を行ってきた。1988年から1990年には、フランス、リヨンにあるWHO国際癌研究機関の山崎洋博士（ギャップ結合と癌の発生について世界のトップ研究者であった）の下に留学する機会を得、それ以来、ギャップ結合研究をライフワークにしている。

ギャップ結合（gap junctions）は、隣りあった動物細胞間を直接連絡する蛋白質の円筒（チャネル）で、このチャネルを通って、分子量1,000以下の物質が細胞間を移行すること（細胞間コミュニケーション）ができる。例えば、心臓の心筋細胞が同期して収縮と弛緩を繰り返し全身に血液を送り出すことができるのは、ギャップ結合が心筋細胞間のコミュニケーションを可能にしているからである。心筋

次ページへ続く↗

梗塞では、ギャップ結合の異常が起こり、それにより不整脈が発生し、ヒトの命を奪っている。私はこれまでギャップ結合とそれを作っているコネキシンタンパク質（connexins）に関して、癌、心筋梗塞、難聴などの疾患や胚性幹細胞（ES細胞）を用いて研究してきた。

2. 論文執筆について

今回の論文執筆のきっかけは、昨年の9月25日にライプチッヒのAida SalamehとStefan Dhein両博士から、ギャップ結合の研究トピックスについて、オンラインジャーナルのFrontiers in Pharmacologyに特集を組みたいので、論文を書かないかと招待が届いたことである。2日後Frontiersから約50名の世界のギャップ結合研究者に、抄録締切が11月15日、原稿締切が2月15日で論文執筆の招待が送られた。

そこで、私は10月11日にES細胞とiPS細胞を含めた幹細胞でのギャップ結合タンパク質コネキシンについてミニレビューを書きたいとの返事を出した。このテーマを決めた理由は、第1にES細胞のギャップ結合に関する論文を私たちが世界で最初に発表していたこと（Oyamada et al.,Exp Cell Res, 1996）、第2は3日前（10月8日）に、iPS細胞の樹立で山中伸弥さんがノーベル医学生理学賞を受賞したことである。

その後、抄録締切が1ヵ月延長したため、12月12日に550語の抄録を送り、その日のうちにそれがアクセプトされた。抄録には、ギャップ結合についての一般的な説明、ES細胞とiPS細胞の多能性（身体の全ての細胞に分化することができること）について記述したが、この段階では、論文の詳細な内容を決めていなかった。

今回のミニレビュー執筆の具体的な手順は、オンラインでの文献検索、引用論文のPDFファイルのダウンロード、各論文の内容を系統的レビュー（systematic review）の形式で要約表（summary table）にまとめることであった。最初の文献検索は、医学生物学系の代表的なデータベースであるPubMedに“gap junctions”, “connexins”, “ES cells”, “iPS cells”などのキーワードを入れて論文を探すことからはじめ、さらに1996年に私たちが発表したES細胞の論文がその後どのような論文に引用されているかをGoogle Scholar等のオンライン検索システムで調べた。その結果、われわれのES細胞論文は約50編の論文に引用されていることが分かり、それらの約50編とPubMedの検索と併せて最終的には約180編の英語論文を含むEndNote（定番の文献データベースアプリケーション）ファイルを作成した。次に約180編の論文抄録を読んで、重要度を4段階（三つ星45編、二つ星13編、一つ星25編、星なし）で分類した。

続いて、70編の論文のPDFファイル（全文）をダウンロードした（クレジットカードによる購入を含めて）。そして、ダウンロードしたPDFファイルを読んで、要点となる文章と図表をアウトラインプロセッサーであるInspiration 9IE（文章だけでなく、図表の貼付け可能）に入力した。

最終的には、ES細胞についての論文21編とiPS細胞についての論文7編を要約表にまとめ、序論、疑問点、iPS細胞におけるギャップ結合についての文章を加えて、論文を完成させた。英語については、4月に人間生活学部の英語教員として着任された高橋博先生にproof readingをしていただいた。そのおかげもあり、4月21日に論文を投稿できた。（当初の原稿締切は、2013年2月15日だったが、最終的には5月15日まで延長された。）

3. Frontiersの特徴

本ジャーナル（Frontiers in Pharmacology）を含めたFrontiers（30種類以上のジャーナルがある）の特徴は、（1）質の高い論文へのオープンアクセス、（2）迅速でフェアな査読制度、（3）論文のアクセプトから早い公開、（4）論文のインパクト（反響）をリアルタイムで知ることができることである。

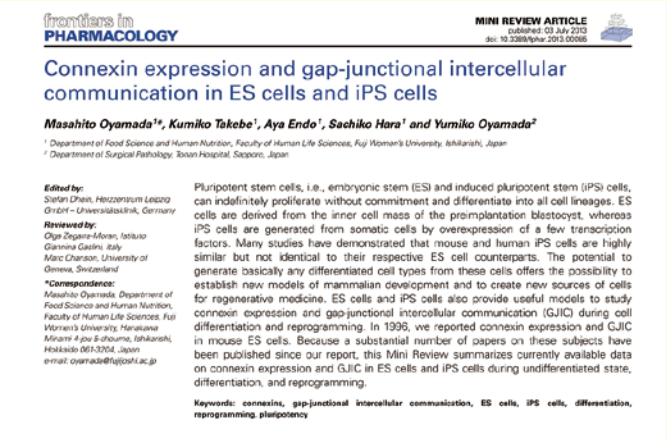
論文執筆の段階までは、従来のreview paper（総説）と同じやり方で進めたが、そのあとのプロセスは、従来のジャーナルとかなり異なっていた。それを痛感したのは、自分たちの論文を投稿する前に、同じジャーナルに投稿されたStefan Dheinらの論文の査読者に指名され、それを行う過程で、査読が迅速でフェアであるということだった。具体的には、Frontiersは、世界初のリアルタイムインターラクティブ　レビューフォーラムというオンライン査読システムをつくり、それは、著者と査読者がオンライン上で、リアルタイムで意見を文書で交換しながら、お互いが納得いくまでディスカッションを続けるものである。Frontiersのホームページ（http://www.frontiersin.org/）では、“Frontiers implemented for the first time the real-time Frontiers Interactive Review Forum, in which authors and review editors collaborate online via a discussion forum until convergence of the review is reached.”と記載されている。また、複数の査読者が同じ論文について、討論することも可能である。更に、Frontiersのユニークな点は、論文がアクセプトされる前は、従来のジャーナルと同様に査読者は匿名だが、アクセプト後は論文に査読者の名前も示されることである。論文を著者と査読者が協力しながら良くしていくという建設的でフェアな査読制度である。実際、今回は自分たちの論文を投稿する前に、他の論文で私の名前が査読者として、Frontiers in Pharmacologyに公開された（http://www.frontiersin.org/pharmacology_of_ion_channels_and_channelopathies/10.3389/fphar.2013.00042/abstract）。

4. 投稿論文の査読、公開、反響

私たちの投稿論文のインターラクティブ　レビューは、投稿の約2週後の5月7日に開始された。査読者は2名で、その段階ではもちろん匿名である。一人目の査読者のコメントは、“This is an excellent and concise review on a particularly important topic.”で始まり、具体的な指示は要約表（summary table）に記述を1つ加えることのみで、minor revisionであった。それに対して、二人目の査読者からは、13項目についてかなり詳細なコメントがあり、全体的にはminor revisionというよりmajor revisionに近いと感じられるものだった。

改訂の締切が35日後の6月11日と定められ、査読者から指摘のあった最新の文献を加えた引用文献約30編を読み直し、査読者からコメントのあった計14項目について、追加を行った。6月7－8日には東京の国立健康・栄養研究所で開催された日本DOHaD研究会に参加したが、学会中と往復の時間でもかなりの改訂を行い、6月12日には改訂稿を投稿することができた。

ここからがインターラクティブ　レビューの良い所で、6月12日の内に2名の査読者から改訂稿についてのコメントが届き、一人目の査読者からは論文としての公開を承認（endorsement of the publication）すること、二人目の査読者からは改訂により論文がかなり良くなったこととマイナーなコメントが1つ示された。そのコメントにしたがって、直ちに再改訂を行い、投稿したところ、二人目の査読者からも論文としての公開を承認され、改訂稿のコメント受取りから承認まで1日で終了することができた。そして、次の日には編集者よりアクセプトの連絡が届き、同日にオープンアクセス（無料で世界中から論文ファイルのダウンロードができる）の費用（575ユーロ）の請求があった。クレジットカードで支払ったところ、直ちにインターネット上で、抄録と論文の原稿ファイル（MSワードファイルをPDFファイルに変換したもの）が公開された。つまり、論文がアクセプトされた日に、論文の内容が世界に公開された。その後も、6月24日にはauthor’s proofが届き、7月3日に出版稿（写真1）がネット上に公開され（http://www.frontiersin.org/journal/10.3389/fphar.2013.00085/abstract）、その迅速さには驚かされた。


frontiers in PHARMACOLOGY

MINI REVIEW ARTICLE
published: 03 July 2013
doi: 10.3389/fphar.2013.00085

Connexin expression and gap-junctional intercellular communication in ES cells and iPS cells

Masahito Oyamada[1]*, Kumiko Takebe[1], Aya Endo[1], Sachiko Hara[1] and Yumiko Oyamada[2]

[1] Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women’s University, Ishikarishi, Japan
[2] Department of Surgical Pathology, Tonan Hospital, Sapporo, Japan

Edited by:
Stefan Dhein, Herzzentrum Leipzig GmbH – Universitätsklinik, Germany

Reviewed by:
Olga Zegarra-Moran, Istituto Giannina Gaslini, Italy
Marc Chanson, University of Geneva, Switzerland

*Correspondence:
Masahito Oyamada, Department of Food Science and Human Nutrition, Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women’s University, Hanakawa Minami 4-jou 8-choume, Ishikarishi, Hokkaido 061-3204, Japan
e-mail: oyamada@fujijoshi.ac.jp

Pluripotent stem cells, i.e., embryonic stem (ES) and induced pluripotent stem (iPS) cells, can indefinitely proliferate without commitment and differentiate into all cell lineages. ES cells are derived from the inner cell mass of the preimplantation blastocyst, whereas iPS cells are generated from somatic cells by overexpression of a few transcription factors. Many studies have demonstrated that mouse and human iPS cells are highly similar but not identical to their respective ES cell counterparts. The potential to generate basically any differentiated cell types from these cells offers the possibility to establish new models of mammalian development and to create new sources of cells for regenerative medicine. ES cells and iPS cells also provide useful models to study connexin expression and gap-junctional intercellular communication (GJIC) during cell differentiation and reprogramming. In 1996, we reported connexin expression and GJIC in mouse ES cells. Because a substantial number of papers on these subjects have been published since our report, this Mini Review summarizes currently available data on connexin expression and GJIC in ES cells and iPS cells during undifferentiated state, differentiation, and reprogramming.

Keywords: connexins, gap-junctional intercellular communication, ES cells, iPS cells, differentiation, reprogramming, pluripotency

写真1．Frontiers in Pharmacologyに掲載された論文の最初の部分

更にFrontiersの特徴であるが、査読者の氏名が論文のアクセプト後に公開され、二人目の査読者（たくさんのコメントをくれた）がスイス、ジュネーブ大学のMarc Chanson博士であることが分かった。Marcとは20年来の知り合いであり、論文公開直後（7月13－18日に開催された国際ギャップ結合会議（アメリカ、サウスキャロライナ州、チャールストン）でも話をすることができた（写真2）。

Frontiersのもう一つの特徴は、論文のインパクト（反響）をリアルタイムで知ることができることである。6月13日から論文の抄録を読んだ人数や、PDFファイルをダウンロードした人数を毎日リアルタイムで表示している。ちなみに9月11日現在、私たちの論文の抄録を427名が読んでおり、106名がPDFファイルをダウンロードしていることとその分布が世界地図上に示されている。また、医学生物学系の代表的なデータベースであるPubMedには、7月10日に掲載され、オープンアクセスであることがFree PMC Articleとして示されている（http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/23840189）。

おわりに

Frontiers in Pharmacologyへの論文執筆を通じて体験した事柄を記載することによって、最近のグローバルな学術論文出版事情を紹介した。

参考文献

1. Oyamada M, Takebe K, Endo A, Hara S & Oyamada Y (2013) Connexin expression and gap-junctional intercellular communication in ES cells and iPS cells. Front Pharmacol 4, 85, doi: 10.3389/fphar.2013.00085.

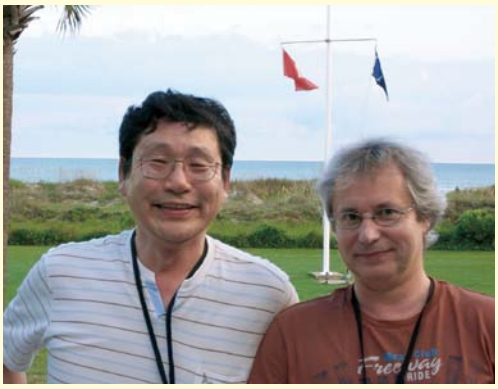


写真2．Marc Chanson博士（スイス、ジュネーブ大学）と著者［国際ギャップ結合会議（アメリカ、サウスキャロライナ州、チャールストン、2013年7月13-18日）において］

教員著作紹介

先生方に自著の紹介をしていただきました。図書館には、本館・花川館それぞれに教員著作コーナーがあり、所属学部の先生による2009年以降の著作がまとめてあります。今回紹介した本はもちろんですが、他にも著作物があります。貸出出来るので研究内容を知る機会に、ぜひご覧ください。

『困惑する書記（エクリチュール）：『万葉代匠記』の発明』丸山　隆司著

おうふう発行，2012年12月15日
所蔵館：本館

日本語・日本文学科
丸山　隆司

江戸は元禄期、すなわち、17世紀の末、真言宗の僧侶である契沖という人物が『万葉集』の注釈書『万葉代匠記』を書く。この書は、水戸光圀の依頼によって書かれる。つまり、この書は水戸光圀というパトロンのサポートがあって完成する。したがって、その書名・代匠記（匠（たくみ）に代わっての記）の「匠」とは、どうやら光圀のことを指すらしい。

ところで、『万葉集』は漢字でのみ書かれている。『万葉集』を読み解くためには、その漢字に訓（よ）みをつけて歌に再現する。だが、そもそも漢字に覆われているのだから、その漢字にどんな訓（よ）みが託されているのか見えない。そこで、とりあえず、その漢字は古代日本語を表していると想定する。いいかえれば、仮説を立てる。暗号解読の方法である。だが、その古代日本語はどんな姿をしているのか。すくなくとも、契沖以前にはこのことは漠然としか気づかれてこなかった。契沖は、古代日本語の姿を五十音図として提起する。五十音図は契沖が「発明」した。そこからさらに契沖は、この五十音図にしたがって古代日本語の正しい仮名遣いを極めようとする。だが、そこには日本語の書記をめぐるアポリア（難問）が待ち受けていた。契沖の「発明」が開けたパンドラの匣、すなわち、困惑する書記（エクリチュール）をめぐって立ちあがる言説の様相とはどのようなものであったのか。

『デザインで読み解くフランス文化：クロニクル1950』三宅理一著

六耀社発行，2012年12月25日
所蔵館：花川館

人間生活学科・副学長
三宅　理一

デザインという切り口で文化史を眺めてみると、人々のクリエーティブな発想がどのようなかたちで現実化し、社会を牽引してきたかがよくわかるものです。1950年代のフランスでは、第二次大戦後の開放的な雰囲気とフロンティアに挑戦しようとする意気込みとが合体し、高度の技術をともなう斬新なデザインが次から次に発表されました。たとえば、女性のファッションを一変させたピンヒールがそうです。1954年にフランスの靴デザイナーのロジェ・ヴィヴィエが世に送り出したものですが、足のラインを強調することが大きな課題となった結果、航空機用の材料を用いてピンの部分を設計するというしごく面倒な工程を経て完成に到ります。

ウインター・スポーツに欠かせないモンクレールのダウンジャケットやロシニョールのスキーも、この時代にベストセラーを出しています。昔からの職人技術を引き継いだ企業家たちが精魂込めて作り上げた製品が一世を風靡したということです。その点では、女性たちの間で強く支持されているル・クルーゼのコケル（角鍋）やココット（両手鍋）も、北フランスの鋳物の技術を援用したという点で同じでしょう。熱の伝わり方が微妙で料理が美味しく仕上がるという点で他社の追随を許しません。

この時代のフランス人が生み出したデザインは、アメリカとは違ってエスプリに富み、しかも徹底して人間中心であるという点でユニークです。ビキニからロケットに到る多彩なブランドの開発のプロセスを知ることで、知られざる現代史の世界が浮かび上がってきます。

『5 分ですっきり読める聖書物語＜旧約篇＞』

成美文庫
阿部包監修

成美堂出版発行,
2011 年 3 月 20 日
所蔵館：花川館

人間生活学科
阿部　包

この本は、聖書に関心はあるけれど、自分で通読するのは面倒という初心者のために企画されました。全体は、「聖書ってどんな本?」、「天地創造と人の誕生」、「イスラエルの民を導くモーセと英雄たち」、「イスラエルの王制時代」、「王国の分裂」、「預言者とそのほかの物語」の六章からなっています。地図や年表、関係図やポイントを図示したイラストなどを要所要所にふんだんに配して、それぞれのエピソードの理解を助ける工夫も凝らしています。また、本文では書ききれない情報を、＜「旧約聖書」ちょこっとコラム＞にまとめて適宜挿入しています。

聖書の授業を担当していて気づくのは、正確な知識の欠如が偏見の土壌になっていること、また、世界を知りたいという欲求が若い世代の間に不思議なほど弱いことです。外界に自分を開かずに内向きに自足しているのだとすれば、せっかく命をいただいている甲斐がないではないか。そう感じるのはわたしが還暦を過ぎた世代だからでしょうか。

聖書を読むという営みは、様々な問いの前に否応なく読者を立たせます。その問いと真摯に向き合う時、自分の世界は押し広げられ、偏見も一つひとつ除かれてゆくでしょう。

文庫判で250頁弱というコンパクトな体裁の中に旧約聖書の主要なエピソードを盛り込んだ本書は、初心者だけでなく、旧約聖書に親しんできた読者が自分の知識を振り返って再確認する上でも十分に役立つに違いありません。

『カムイチェプ×雪化粧@地域食堂』

藤女子大学人間生活学部公開講座シリーズ［イッカルンクル］
菊地和美監修，川原功司編集

藤女子大学人間生活学部公開講座委員会発行,
2013 年 3 月 20 日
所蔵館：両館所蔵

食物栄養学科
菊地　和美

このたび、藤女子大学人間生活学部公開講座シリーズ［イッカルンクル］第2巻が完成し、発行致しましたのでご紹介します。

本書は、第1巻「はまなす×いそこもりぐも@石狩浜」に続き、第2巻として平成24年度人間生活学部公開講座のテーマを基に展開しています。第2巻の特徴は、公開講座「石狩の食」の中から市川治先生（酪農学園大学教授）による『石狩の「食」からみた農産物とその経済性』、食物栄養学科学生（村田ゼミ）による実践活動報告から石狩産食材を活かした『藤女子食堂のレシピ』をカラーページで掲載しているところにあります。

また、石狩における人とのつながりに関する寄稿文『食を通した地域コミュニティづくり―地域食堂「きずな」のめざすもの』や行政と生産者、消費者とのつながりに関しては、『地産地消をめざして』として「いしかり食と農のカレッジ」と「いしかり地産地消を楽しむ会」の取り組みを紹介しました。

食文化の今と昔を探る視点からは石狩鍋を取り上げ、石狩ブランドをめぐっては、藤ブランド・ワインの開発秘話『藤女子大学生とワインを造る』（池田先生）、『石狩あいロード・スイーツ』（飯村先生）、石狩産食材のコラム『お酒のおともに欠かせません』（伊井ゼミ）があります。

最後にシリーズ第1巻に続いて、座談会「ミシュラン寿司屋が語る厚田の味」を掲載しました（インタビュアー武部先生）。あとがきは、元保育学科川原先生のご執筆です。本書を通じて、多くの方々に、藤女子大学人間生活学部公開講座が石狩の中でどのように展開されているのかという点を少しでも身近に感じてもらいたいと願っています。

〈雑誌〉

Fuji Women's University
Department of English Language
and Culture 発行，2013 年 3 月創刊
所蔵館：本館

英語文化学科
山木戸浩子

Fuji English Review
Hiroko Yamakido (ed.)

2013年3月に英語文化学科より学術論文雑誌 *Fuji English Review* が創刊されました。創刊号は、2012年9月8日に16条キャンパスで開催された言語学のワークショップ One-day Workshop on Syntax and Semantics（英語文化学科主催）の論文集です。ワークショップの基調講演者であり、統語論・意味論の分野で世界的に有名な Stony Brook 大学（米国ニューヨーク州）の Richard K. Larson 先生の論文を始め、質の高い統語論・形態論・意味論に関する研究論文が7つ収録されています。内容は、二重目的語をとる英語のイディオムは本当に「イディオム」なのか（つまり、合成性がないのか）どうかについて論じた Larson 先生の論文 “On “Double Object Idioms” in English” の他に、“Some Discourse-Scope Properties of Adverbial Clauses” (Yoshio Endo, Kanda University of International Studies)、“Decomposing Indefinite Pronouns” (Ken Hiraiwa, Meiji Gakuin University) など、多岐にわたっております。

今後、*Fuji English Review* は毎年（あるいは隔年で）出版され、大学図書館に収蔵される予定です。

展示紹介　学生による企画展示

オススメ本を展示してくれた学生さんに、展示した中でも特にオススメの1冊を紹介してもらいました。
今回紹介された資料以外に、展示に使用した資料のリストは図書館にありますのでご覧ください。
図書館では、展示してくださる学生さんを募集しています。興味のある方は、カウンター職員にお尋ねください。

日本語・日本文学科3年　梅川さん

【はじまりの 13 冊】というテーマで展示をいたしました。さまざまなジャンルから、入門的な本を集めました。その中で、特にわたしのお気に入りの本は、『別冊太陽　万葉集入門』（2011 年 4 月、平凡社）です。

この本の魅力は、専門用語を分かりやすく解説していることだけではありません。多様な写本の姿を、カラー写真で掲載しているところも見どころです。藍染めの漉き紙に力強い書で記された「藍紙本」、金銀の切箔が押された「金沢本」、木版刊行された「寛永版本」…。色鮮やかな写真によって、それぞれの写本の個性が伝わってきます。万葉集が数多くの写本によって書きのこされてきたということを、視覚的に理解することができる一冊です。

雑誌『別冊太陽　万葉集入門』

（本館所蔵）

食物栄養学科4年　中島さん

今回の展示では、【食物栄養学科の方にオススメな本】というテーマで、食物栄養学科の 1 ～ 3 年生に是非利用して頂きたい本を展示させて頂きました。

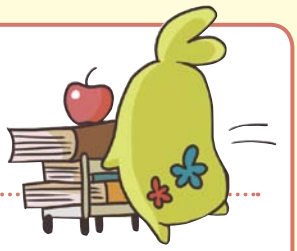
私は食物栄養学科での授業のレポートを書くときに主に図書館を利用してきました。そのため、私が利用してきた本を改めて振り返ってみると、栄養学分野が大きな割合を占めていました。

その中で『病気がみえる』という本は、3 年生の病院実習の時に利用した本で大変役立ちました。この本には、授業で学んだこと以外の疾患や治療法が記載されており、また CT 画像やイラストが多いため、とてもわかりやすいです。病院では管理栄養士も他職種と協働するため、多くの知識が必要です。将来病院に就職したときに、とても活用できる本だと思います。

『病気がみえる』（シリーズ名）

請求記号：492/I67/1-10（花川館所蔵）

私たちはこれまで、講義やレポートを書く上で役に立った本や、みなさんに読んで欲しい小説やエッセイなどを【私たちのオススメ本】として紹介しました。これらの本を読んで楽しんだり、実際に勉強に役立てていただければ幸いです。

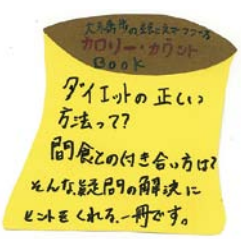


食物栄養学科4年　廣鰭さん

今回は、『大橋歩の絵と文でつづるカロリー・カウント BOOK』という本についてご紹介します。この本は食事を通して健康になるための方法が書かれています。また、栄養学を学んできた学生であれば、わかりやすく栄養指導を行うためのヒントが学べるかと思います。この本を通して、健康的な食生活を送ることや栄養指導に関心を持っていただければ幸いです。

『大橋歩の絵と文でつづる
カロリー・カウントBOOK』大橋歩，荒牧麻子著

請求記号：498.55/O69（花川館所蔵）



食物栄養学科4年　坂口さん

紹介する『地球のごはん:世界 30 か国 80 人の“いただきます！”』は世界中の人々の 1 日分の食事を総摂取カロリー順にならべ、それぞれの職業やライフスタイル、食材リストとともに紹介しています。大きな本ですが、たくさんの写真を使用しており食事から生活や彼らが住んでいる国の状況が見えてきます。興味のある食事の内容や国から読んでみて欲しい 1 冊です。

『地球のごはん:世界30か国80人の“いただきます!”』
ピーター・メンツェル，フェイス・ダルージオ著

請求記号：383.8/Me56（花川館所蔵）

図書館委員会からのお知らせ

・2013年度図書館委員

図書館長

木村　信一（文学部・英語文化学科）

委員・文学部

大石　悦子（英語文化学科）
丸山　隆司（日本語・日本文学科）
杉内　峰彦（文化総合学科）

委員・人間生活学部

岡崎由佳子（人間生活学科）
小山田正人（食物栄養学科）
吾田富士子（保育学科）

・2013年度図書館委員会が実行すべき課題

図書館第Ⅱ期中期五カ年計画第一年次の活動

2012年度図書館委員会に於いて策定し、本年度から実施を開始する第Ⅱ期計画について年次ごとに具体的計画を立案し実行する。

1. 学習支援に関する目標
   - ・シラバス掲載図書および講義関連資料の整備充実を図る。
   - ・教員指定図書制度の再構築を図る。
   - ・内容が常に改版される資料について最新版への更新を図る。
   - ・レファレンスサービスの高度化を図る。
   - ・購入希望図書制度の一層の活用を図る。
2. 教育活動支援に関する目標
   - ・情報リテラシー教育の充実を図る。
3. 研究活動支援に関する目標
   - ・未電子化紀要の電子化に向けて検討を開始する。
   - ・現在導入している電子ジャーナルの見直しをおこなう。
4. 業務改善に関する目標
   - ・図書整理業務の簡素化を図る。
5. 施設設備の整備に関する目標
   - ・視聴覚機器及び什器類の更新を図る。
6. 図書館資料の保存に関する目標
   - ・所蔵紀要類のうち電子化対象誌について冊子体での保存期間を検討する。
7. 広報活動の強化に関する目標
   - ・読書推進事業の一環として学生さんとの協働作業を進める。
   - ・図書館キャラクター**「きしんさん」**の活用を進める。
8. 社会貢献に関する目標
   - ・石狩市民図書館との相互協力について見直しを進める。
9. 学外関係機関との連携に関する目標
   - ・北海道地区私立大学図書館協議会の活動を進める。

「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について」（審議のまとめ）が公表されました。（2013年8月）

文部科学省の諮問機関である**「科学技術・学術審議会　学術分科会　学術情報委員会」**での検討結果です。平成25年5月に決定された**「教育振興基本計画」**では、学生が主体的に課題解決に取り組む能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要なこと、その際、学生の主体的な学修の基盤となる図書館の機能強化やICTを活用した双方向型の授業・自修支援など、学修環境整備への支援を促進することとされています。これを受け、学術情報委員会では、具体的に**「学術情報基盤」**の充実を挙げています。これは最新の教育研究成果に基づく書籍、論文、データ、教材等のコンテンツ、それらを流通させるためのシステムや情報ネットワーク及び情報を利活用する際の物理的空間や人的支援を提供する図書館を想定しています。本学図書館も上記の課題解決を当面の目標としサービス内容の充実を図りたいと考えています。

図/書/館/資/料 Navi（ナビ） 第2回

江戸期の写本への招待
——大和物語

日本語・日本文学科　小山　清文

『大和物語』は、十世紀中頃の天暦年間にほぼ成立したとされる物語であり、作者や書名の由来などについては未詳である。百七十三の章段から成り、『伊勢物語』と同じ歌物語に分類されているが、世俗的興味に濃く彩られた暴露的な歌語り（和歌の作者・内容・詠作事情などを口頭で語ること）をもとにしたものとされており、文学的評価は『伊勢物語』と比べると不当なまでに貶められているのが実状である。

そうした中で、二十年近く藤女子大学で月例で行われている『大和物語』の研究会の成果によって、最近はその評価が見直されつつあるというのが現時点での研究状況である。

さて、藤女子大学図書館の蔵書には、かつて江戸時代以前の写本や版本などの資料が皆無であったのだが、『大和物語』研究の一拠点となっていたこともあり、一大決心をして、日本語・日本文学科に写本の購入を提案し、それが認められて以降、現在はごくわずかながら写本や版本を所蔵するに至っている。これは2006年のことであり、『大和物語』の購入を機に、取り急ぎ貴重図書の取り扱い（閲覧・貸出）に関するルールを定めなければと慌てたものである。

かくして、潮音堂の古書目録に掲載された『大和物語』の写本が本学の蔵書となったのである。以下に、この本の概容を摘記しておく。

帙入の二冊本で、保存状態は比較的良好であり、表紙は、

布目に蝙蝠文の金の刷出があり、外題は表紙中央に金箔散らしの貼題箋で「大和物語一（二）」、内題は「大和物語上（下）」、「一」には尾題「大和物語一」も記されている。また、「一」の裏表紙裏には「積石堂」の印が押されている。本文は、楮紙で袋綴装、四目綴、穴四、糸茶色、寸法は、縦二十七センチ、横十九・二センチで、一面十三行、一行字数二十四～三十字程度、字高十九・〇～十九・二センチ、丁数は遊び前一丁、本文が「一」は三十四丁、「二」は三十一丁、後一丁（「二」のみ）であり、本文冒頭の印記は、朱文角印「尾張連安食氏蔵書印」および朱文楕円「堀口美賢蔵」とある。「一」は百三十三段まで、「二」は百三十四段からとなっており、字は非常に読み易く、和歌出典・人物注記・異本注記などが墨書傍記されている。江戸時代中期頃までの書写と思われる。本文は、江戸時代以来流布本となった、第一系統（二条家本系統）に類別されるものである。また、「一」の末尾には本文とは別筆で（おそらく購入者などの書き入れであろうか）、「~~やつまとか~~（やいつこか）身にいりにける賜ものは／海より深き恵み也けり」と書き込まれている。

繰り返しになるが、7年前までは本学は複製本の類しか所蔵しておらず、写本や版本の実物を実際に手に取って閲覧することは叶わなかったのだが、現在は取り扱い上の注意は必要であるが閲覧が可能となっている。せっかくの機会であるから江戸時代の本を手に取って見てみるのも一興ではなかろうか。

『大和物語』　請求記号：913.33/Y45/1-2（本館所蔵）
＊禁帯出資料のため館内閲覧のみ可能です。ご利用の際は、カウンター職員にお尋ねください。

●編集後記●

86号は「最近の学術論文公開事情—グローバルなオンラインジャーナルへの論文執筆を経験して—」と題して巻頭言に小山田正人先生から、図書館資料Naviの第2回には「江戸期の写本への招待—大和物語」と題して小山清文先生から、また企画展示に参加した学生の皆さんからご寄稿いただきました。

学生の皆さんは普段、本を読まれますか？ スマートフォンが普及し、指先一つで瞬時に情報を得られるようになった昨今、紙を繰ってじっくりと読み進めていく必要がある本は少し面倒に感じるかもしれません。

図書館だよりの記事には、様々な人の読書の履歴が記されています。

読書の秋に合わせて、先生の書かれた本や自分と同年代の学生さんが読んでいる本など、掲載された本を読むことにチャレンジしてみませんか？ きっとそこから何か得るものがあるはずです。

図書館だよりを通じて、皆さんが良い本に巡り合えますように。　（K）

図書館キャラクター「きしんさん」

ケータイから本が探せます！

QRコード

藤女子大学　図書館だより　第86号 2013.10
発行者　藤女子大学図書館 札幌市北区北16条西2丁目
TEL 011-736-5407　FAX 011-709-4770
http://library.fujijoshi.ac.jp/